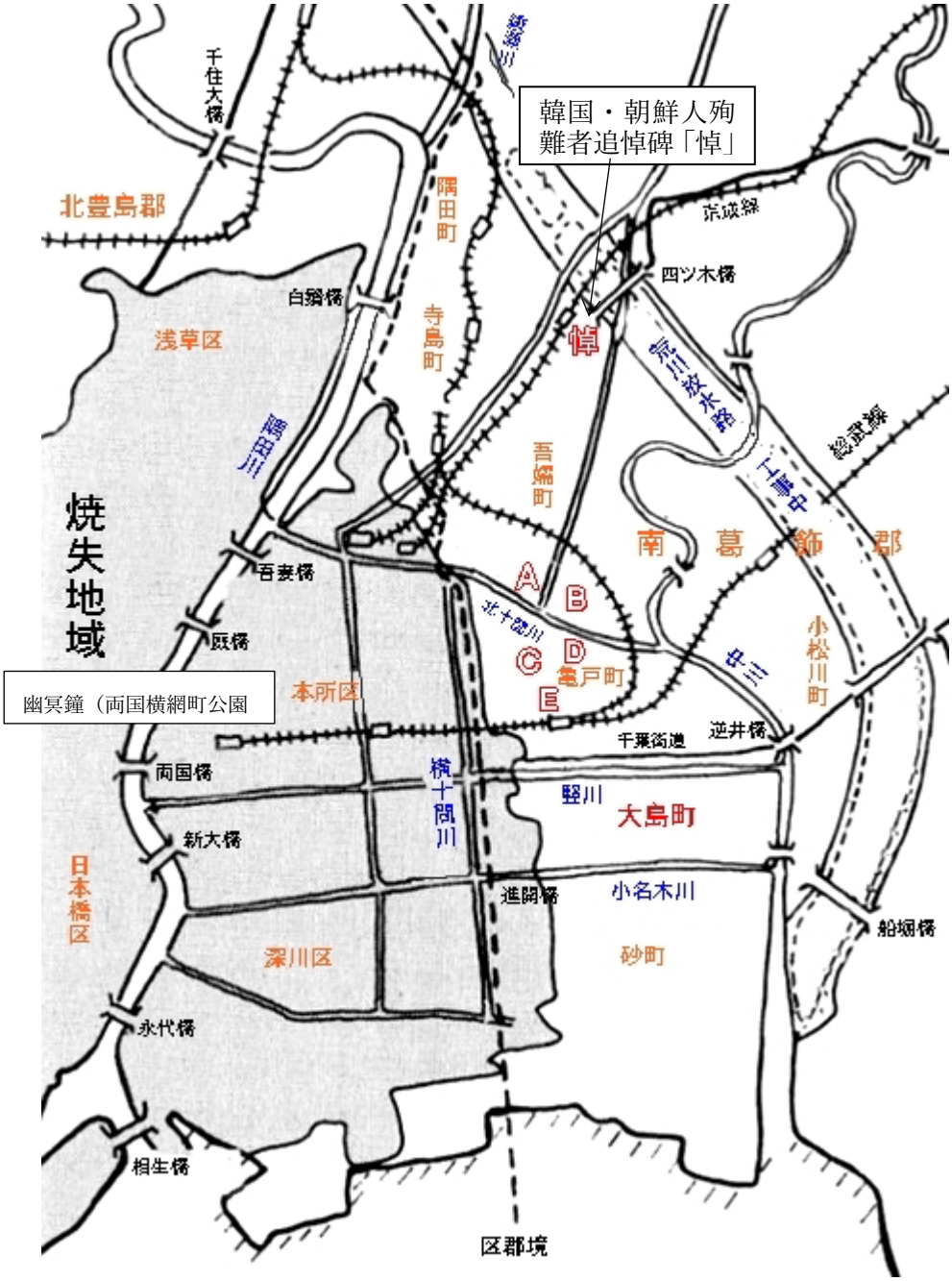
関東大震災時の朝鮮人、中国人、労働組合活動家の虐殺



幽冥鐘（両国横網町公園

（『風よ　鳳仙花の歌をはこべ』関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会）の地図をもとに作成

当時、東京東部地域は南葛飾郡と呼ばれていた。関東大震災のとき火事は都心から東に延焼し、横十間川の線でほぼ止まった。しかし、この東の地域が朝鮮人、中国人虐殺、そして労働組合活動家虐殺の主要地域となった。横十間川の東に亀戸駅がある。この辺りが亀戸町、その南が大島町、そして砂町。北に吾嬬町、寺島町。この辺り一帯は河川も多く、当時工場地帯として発展していた。大工場から中小まで、紡績、機械、化学、染織、製鋼、スプリング、セメント、肥料工場等々。そこは同時に労働者の居住区でもあり、また労働運動の中心地でもあった。

【左地図説明】

A：東京モスリン争議
（今の文花団地）

B：「女工哀史」の舞台
（今の立花団地）

C：南葛労働会の本部
（亀戸町 3519 番地：今の十三間通りと蔵前橋通りの交差するあたり）

D：亀戸事件犠牲者の碑
（赤門浄心寺）

E：弾圧・虐殺の中心であった亀戸警察署（亀戸駅のすぐ北側

たくさんの韓国・朝鮮人が虐殺された四ツ木橋のたもとに「韓国・朝鮮人殉難者追悼碑『悼』」がある。

中国人労働者は主に大島町に住んでいた。

大島町は、竪川、小名木川、横十間川、中川に囲まれ、それを交通路として発展してきた工場地帯であり、中国人労働者はこの工場地帯の荷揚げ人夫として働いていた。9 月 3 日、戒厳軍・警察・自警団などによって、大島町 8 丁目の広場で集団虐殺された。ほかに、横浜周辺での虐殺、留学生の虐殺などが報告されている。虐殺された中国人被害者の名簿は上海にもどった王兆澄らの聞き取りによって、750 名余が明らかにされている。